

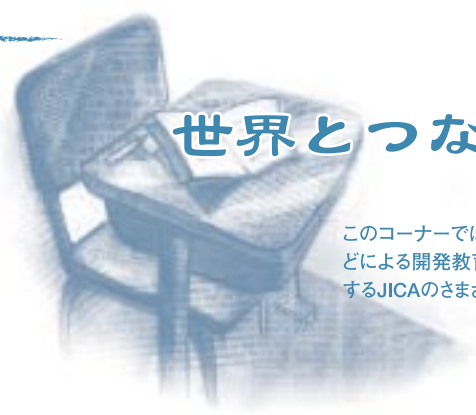


2007年11月に行われた「にいがたJICA-Kidsプロジェクト」で、フェアトレード商品について説明する末武さん。テレビ会議でタイの高校生と青葉台中学校の生徒を結んだ

# 世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



## 第11回

# こんな先生に教わりたい！

**野上** 末武先生は、海外との交流を通して日本の子どもたちの国際理解を深めるとともに、論理的思考や実践力を鍛え、国際貢献できる日本人の育成を目指していますが、開発教育に取り組み始めた経緯



photo by Asada Yuki

を教えてください。  
**末武** 1995年に世界の国々の課題について調べる授業をしようと考え、生徒に国を選択させたところ、ほとんどの生徒が欧米の国を選んだんです。先進国だけでなく、開発

新潟県長岡市立青葉台中学校教員  
**末武 久人さん**

環境、人権、食料問題など地球規模の課題をテーマに、JICAと協力してユニークな開発教育に取り組み、昨年、第38回博報賞を受賞した新潟県長岡市立青葉台中学校の教員、末武久人さん。JICA地球ひろば国際協力推進員の野上奈緒さんが、教育現場における開発教育の意義やJICAの開発教育支援の活用方法などについて聞いた。  
小・中学生の教育に献身、努力している学校、団体、教員などの優れた業績に対し(財)博報児童教育振興会が授与するもので、末武さんは文化教育育成部門で受賞。また、受賞者の中でも特に奨励に値する人に授与される文部科学大臣奨励賞を受賞した。

に参加した教員も複数いて、帰国後、「にいがたJICA Kidsプロジェクト」<sup>3</sup>に参加するなど、開発教育に精力的に取り組んでいます。授業を通して途上国に関心を持った生徒が、JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募したり、途上国に物資を送る「世界の笑顔のために」プログラム<sup>4</sup>に参加したりもしました。  
**野上** そうした教育を通して、子どもたちに伝えたいことは何ですか？  
**末武** 学習の中で国際人としての生き方を追求してほしいと思っています。貧困などの深刻な課題を抱える途上国の人々のために何ができるかを考える授業を行ったとき、野上さんからフェアトレードの商品を紹介してもらいましたよね。子どもたちはその商品を買うことで、多少なりとも生産者の貧困が解消されることを知り、自分の行動と世界のつながりや、自らの生き方をも考え始めました。

教育は社会とつながっている

いと意味がありません。そのため、生徒の興味や学習動機を身近な地域社会にもつなげるよう配慮し、地域の特性やリソースも積極的に活用しています。教科書に書いてあるとか、試験に出るからという理由で学習するのは面白くないし、教える側もつまらない。教員は、子どもたちが学ぶ価値を感じて、「もっと知りたいたい」と思えるような授業を行い、学んだことはいつか役に立つと、自負心を持って教えるべきです。そのためには本当に価値のあるものを、教員自身も追求していかなければならないと思います。  
**野上** タイに鉛筆を送る「鉛筆プロジェクト」は、生徒自身が考えて始めた活動と聞きました。  
**末武** 「鉛筆プロジェクト」は、生徒が自ら始めた行動の一つです。最初はアフガニスタンに毛布を送るうとしていましたが、調べるうちに輸送費やクリーニング代に膨大なお金がかかり、毛布を輸送しているNGOに頼らなければならぬと分かりました。できる限り自分たちでできる支援をしたい」と結論を出した子どもたちは、途上国に送りやすい鉛筆を校内で集め、野上さんを通じてタイの学校に送り

**地域の国際協力を支える国際協力推進員の活躍**  
全国47都道府県に配置され、各自治体と連携して、地域の人々の国際協力に対する理解促進に努めるJICA国際協力推進員。その一人、(財)長岡市国際交流協会が働く野上奈緒さんは、2005～07年、青年海外協力隊の村落開発普及員としてタイで活動し、帰国後、「もっと多くの日本人に国際協力にかかわってほしい」と推進員になった。  
隊員時代、途上国と新潟の学校を結ぶ「にいがたJICA-Kidsプロジェクト」に協力し、タイの高校生と青葉台中学校の生徒をつなぐ仲介役を担った。末武さんとは、そのころから協力し合っている。また、帰国後は推進員として、独自のネットワークを生かして国際協力に携わる人や団体をつなげるなど、末武さんのような開発教育に力を注ぐ市民の活動を支援している。

ました。自分たちの支援がどこの国の誰を、どのように支えるかが見える支援となったことが、生徒に自信を与えたようです。子どもの根底には何かやりたいという気持ちがあり、それを引き出すのも教員の役割なのです。  
**野上** 学校の先生は非常に忙しいと聞きますが、学校教育の中でもっと開発教育が広がる余地はあると思いますか？  
**末武** 確かに忙しいですが、本当に生徒のためになることを優先していけば、開発教育は重要な単元として残っていくと思います。生徒自身が生き方を考えることもできる開発教育は、子どもたちの人格形成にも役立ちます。  
**野上** 開発教育が英語や社会科の授業枠だけでなく、ほかの教科でも取り入れられる可能性はありますか？  
**末武** 大いにあります。ガナでは、教員は地位が低くて給料も少なく、良い教員が育たないと聞きました。そのため、JICAは日本からたくさん理科の授業枠を確保し、教員の質の向上を支援しているそうです。日本でも鍛えられた教員が、途上国の教育全体の底上げに貢献し、さらに、その経験を持ち帰って日本の子どもたちに

<sup>3</sup> 3年間を通して、新潟県出身のJICAボランティアと新潟県内の学校を結ぶプログラム。JICAボランティア経験者による出前講座やメール・ビデオレター・テレビ会議などを通じて交流を行う。  
<sup>4</sup> 途上国で必要とされている教育、福祉、スポーツ、文化などの関連物品を日本国内で募集し、JICAボランティアを通じて途上国へ届けるプログラム。

途上国にも関心を持って各国の現状を正しく理解し、南北格差是正のために自ら行動できるようになってほしいと思ったのが始まりです。  
**野上** JICAや(財)新潟県国際交流協会などと連携して教材開発や教科の枠を超えた教育を実践していますが、JICAの開発教育支援プログラムをどのように活用していますか？  
**末武** 私は社会科の教員なので授業で各国の歴史や問題を扱いますが、教科書によつては一般の事実認識とずれている場合があります。そこで、EメールやJICAのテレビ会議システムなどを使って、タイの同世代の生徒と情報交換して、同国の課題に対する理解を深めました。また、JICAの国際協力出前講座<sup>1</sup>を利用して、途上国の留学生や青年海外協力隊経験者から直接話を聞くことで、生徒たちは世界の貧困を現実のものとして受け止められるようになりまし。さらに、2003年に教師海外研修<sup>2</sup>でガナナに行ったことは、私自身が途上国の現状や日本の国際協力について知る良い機会になりました。他校の教員とのつながりもできました。校内では、私の話を聞いて翌年の教師海外研修

<sup>1</sup> 開発途上国の実情を知り、国際協力の必要性を理解してもらうため、元青年海外協力隊やシニア海外ボランティアを講師として学校などに派遣し、途上国での経験を生かした国際理解教育・開発教育を行う。  
<sup>2</sup> 学校教員が途上国の社会・教育事情やJICAの活動などを視察し、その経験を日本の教育現場に還元することが目的。